慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	心理学専攻と三田哲学 : そして心理学と哲学
Sub Title	
Author	林, 銈蔵 小川, 隆 印東, 太郎 古崎, 敬 佐藤, 方哉 坂上, 貴之
Publisher	三田哲學會
Publication year	1991
Jtitle	哲學 No.92 (1991. 4) ,p.3- 21
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	文学部創設百周年記念論文集II
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000092-0003

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

心理学専攻と三田哲学
——そして心理学と哲学

語る名誉教授たち
林　　銈蔵（誌上参加）
小川　　隆
印東太郎
聞く現役たち
古崎　　敬
佐藤方哉
坂上貴之

佐藤　今日はお忙しいところをお時間をおさきくださいまして有難うございます．ちょうど印東先生が京都での国際応用心理学会のために一時帰国されましたので，お三方からそろってお話をうかがえると楽しみにしていたのですが，あいにく，林先生が急にご都合が悪くなりましたので，後でお話をうかがって，誌上参加という形でまとめさせていただくつもりです．

まず三田哲学会の思い出といったところからお話しいただけますでしょうか。

印東　心理学は哲学会そのものとは直接の関係はないのですが，私が学生の頃は心理学科というのはないわけで，哲学科の中の心理学専攻だったわけです．したがって専攻科目として西洋哲学はもちろん，東洋哲学なんかも取らされたりしまして，今のカリキュラムとはかなり違った形でした．逆にいえば，だからその頃はまだ哲学会と関係が深かったといえます．

坂上　哲学科から社会，心理，教育が分れたのはいつだったのかと調べ

てみましたら，大学院の方が学部より早いんですね．新制の大学院としてははじめ昭和 26 年に社会学だけで社会学研究科を創り，その後昭和 28 年に心理学が加わり，最後に教育学が加わったのは昭和 36 年になっています．学部の方は社会学・心理学・教育学で哲学科から分かれて社心教学科を創ったのは昭和 38 年だそうです．

佐藤　(独り言)　すると大学院社会学研究科が今の形になってから来年で 30 周年になるわけか．

小川　慶応の場合だけでなくて，どこでも心理学は哲学から分かれたのです．哲学は倫理学だとか論理学のような，どっちかというとゾルレンの学問であって……，心理学はザインの学としてむしろ自然科学的な方法を取り入れてだんだんと離れていったという感じです．どこの大学でも．

佐藤　哲学科から分れるときには私はもう助手になっていましたが，そのころ，分かれるべきだという議論と，やはり哲学にとどまっていたほうがいいんじゃないか，というような何か会議をした記憶があります．ただ，分かれたとはいっても，独立した社心教学科で学会をつくって雑誌を出すといったことはしないでほしいといったことがあったようで，三田哲学会にそのまま属していたわけです．それが今日までずっと続いているわけです．

小川　心理として慶応の中で発表するようなものはすべて「哲学」に出していたわけでした．

佐藤　昭和 36 年に「大学院社会学研究科紀要」が出ましたが，その後でも私は「哲学」に何回か書きました．むしろ「哲学」に出す人の方が多いですね，「紀要」の方は学生が多くて．

小川　私は東大におりましたが，東大では「哲学雑誌」というのがずっと出ていたのです．当時は操作主義を中心に心理学の方法論が割合に盛んでした．それで私も方法論に非常に興味をもっていたものですから，いくつか操作主義に関するものを「哲学雑誌」に出していました．それで慶応

に来てからも，第91集にも書きましたことですが，松本正夫先生にこの「哲学」にもぜひ書けと言われて書いたのが，35年に出した「心理学における構成の問題」という論文です．その前後に哲学会の例会で一度講演をしたと思うのですが，その内容はその論文と同じような主旨のものです．

慶応では横山先生を中心にして，実験心理学の非常に厳密な研究がずっとやられてきたわけです，特に感覚，知覚などを中心に．それでその論文が「哲学」にかなり載っています．私はそれを東大にいるころから時々見ていました．印象に残っているのは，友田さんと林さんが書かれた「射撃」についての論文です．

印東　戦争中の研究でしょう，空気銃かなんかのね．

林　あれは「哲学」の20号に友田さんと私の名で掲載されたものですが，その前に私が応用心理学会で発表しています．発表内容はその日の読売新聞の夕刊でとりあげられました．横山先生は，基礎と応用，すなわち日本心理学会に発表される仕事と応用心理学会に出されるものとを明確に区別されておられた．この射撃の研究は応用心理学会に発表された問題の一つで，この種の研究を日本心理学会で発表されることを絶対にお許しにならなかったのです．

古崎　当時応用心理学会はあったのですか？

林　ありました．創設間もなくでしょう．心理学会のある主だった人たちが結束して応用心理学会を創設されたのです．この発表はその数回目の時だったのでしょう．当時は応用心理学会は東西二つあり，私の記憶では少なくとも合同した学会が数回開かれました．

古崎　そのころは会員が少なかったのでしょうね．

林　そうです．プログラムが一ページで済んだぐらいですから．

小川　あの射撃の論文は東大にいたとき読んで非常に面白いと思ったものの一つですよ．私は塾に来まして，それまで塾になかった動物実験を加えようという気持ちになりました．動物実験では東大でも実際はそんなに

やっていたわけではないのですけれども，同僚の八木君は戦争中からネズミの実験を始めていたし，高木貞二先生ご自身もヤマガラの研究をかなり前からご自分の家でやっておられました．それでハーバード大学のスキナー教授からハト用のスキナーボックスを送って戴き，当時学務理事だった橋本先生にお願いして小さなハト小屋を作って戴き，ボツボツとハトの実験を始めたわけです．動物実験に関する新しい方法論を，大体5,6年の間に4つか5つの論文にして「哲学」に出したと思います．私が後に学位論文としてまとめたものの方法論的な部分はこの間の「哲学」に出したものです．それから私は昭和40年からヨーロッパからアメリカへ留学，帰って来てからも1篇は出したと思いますが，それからは「哲学」に書かなくなってしまいました．

印東　私もいくつか書きましたが……

小川　書いたし，例会でも話しました．

印東　そうでしたかね．それはちょっと覚えていない．

小川　第一研究室でやりましたよ．

佐藤　私が覚えているのは，学生の頃だったか，助手になった頃かはっきりしませんが，シンポジゥムで「人間疎外」というのをやって……

印東　それは覚えています．沢田允茂さんに引っ張りだされた．

佐藤　野口ルームかなんかで……，その時はかなり盛会で面白かったです．

林　例会の活動は私が日吉に移ってからのことではないかと思います．誰がいつ話したとかいった正確なことは「哲学」に載っていると思います．ほとんど毎月会が開かれて，場所としては交詢社がよく使われていました．古い「哲学」の巻末には卒業論文の著者，タイトルなどが紹介されたり，毎年の講義題目が載っています．例えば，横山先生が何年にボーリングの著書を使われたとか，レビンのトポロジカル心理学が何年に講じられたかなども掲載されています．単に講義題目だけではなく，何が教科書として

使われたかということまで載っているんですよ.

坂上　印東先生は「哲学」には主に実験論文を書かれたのですか？

印東　いえ，やはり議論を中心にしたものを出すようにしていました. ただ，初めの頃は他にあまり発表の場がないものだから，久野君と一緒にやったピアノの実験なんていうのは「哲学」に出しました.

佐藤　久野麗君，現在は南雲さんといいますが，と私は同級で，学部の三年の時の講義で印東先生が忘却曲線の話をされて，無意味綴りや単語や数字などばかりではなく，ピアノの曲を暗譜でひくといった運動反応についての研究があってもいいはずなのにないということをいわれたんです. すると久野君がさっそく実験をやって……

印東　でもその後は比較的議論中心の，ちょうど *Psychological Review* に出すようなものを確か 4 つぐらいは書いていますよ. コンフリクトとかカラーシステムに関するものとか.

古崎　コンフリクトですね.

印東　そうです. それもちゃんと「哲学」向きに題を「逡巡躊躇」と書いています.

古崎　「逡巡躊躇に関する考察」で，副題が「動物と人間におけるコンフリクト」.

印東　昔の文学部と今の文学部とどう違うかといいますと，一番大きな違いは昔は女子学生がいなかったということです. それから，学生の数がはるかに少なかったわけです. ですから，哲学会全体を一丸としてもそんなに大きな数じゃないんです. ですからどうしたって一体として活動せざるを得ないから，心理学と哲学会とはある程度確かに緊密でした. 心理だけで動ける力がなかったのです.

それで私が学生の頃には川合先生とか橋本さんとか，それから船田先生といった方がおられましたが，その方たちは認識論の，伝統的な哲学をやってらしたわけです. その後，沢田さんが来られて，それから松本さんが

おいでになって，科学哲学的な方向が少し出てきたんです．その頃がちょうど小川さんがおっしゃった方法論に興味のある時代で，哲学の方でも，われわれの方でも興味がありましたから，その頃は心理の方でも割合に「哲学」に書いたんです．

坂上　川合先生って川合貞一先生でしょう？　この「心理学研究室50周年誌」をみると，川合先生は心理学の方は教えていらっしゃらなかった．

印東　私はその 50 周年誌を書くときに調べたのですが，塾における心理学の歴史というのは意外なのです．一番初めにヴィッカースとかハーバードから3人教授が派遣されたでしょう．その時，すでにもう心理学というものは入っているわけです．ただし，名目としてはサイコロジーになってはいますが，その内容が何であったかはわかりません．それに，後に実業界に転じられた門野さんという非常に古い塾の先生が，すでにその頃心理学を講じていらっしゃるんです．ですからある意味でポリティカルエコノミーといっしょに，心理，あるいは論理というものが，塾創設の時の福沢先生の一つの理念だったのではないかと思われます．ただし，その内容はまったくわかりませんが，おそらくわれわれが今考えているようなものではなかったでしょう．

小川　門野さんというのは千代田生命の門野幾之進さんでしょう？　私の母方の祖父は昔幼稚舎の舎長をしていたのですが，子供の頃祖父の家に遊びに行くと色々な人が来ているのですが，その中に門野さんもいましてね．それで良く覚えています．しかし心理学の講義をされたのですかね，門野先生は．

林　門野先生は明治 23 年頃，もちろん心理学が専攻として独立するずっと前，専門の区分がないころに論理学，倫理学，心理学を教えておられたのです．

小川　昔の心理学というのは，半分ぐらいは哲学を取らなきゃならなかったのです．

印東　そうです．東大でもそうでしょう？

小川　そうです．それから高等学校（旧制）の先生になるために，心理，論理が一緒になった免状しかなかったのです．

印東　そうでしたね．私も持ってますよ．

小川　ですからその免状を取るために，論理学はもちろん取らなきゃいけないし，その論理学を取るためには哲学を取らなきゃいけないということになってきて，数珠つなぎで哲学史としても古代，中世，近世の3種類を取らなきゃならない．それ以外に哲学概論も取るというふうになっていたのです．その上，先生になるのですから，もちろん教育学概論なども取らなきゃいかんですよ．教育史なんかも，東洋，西洋と．だから，そういうもの全部を取るとなると，心理学はちょっとだけでね．

印東　つまみみたいなもんです．

小川　実験だけが学習単位として特色があったにしましても．

古崎　具体的に申しますと，心理学にはどんな科目があったんですか？いまおっしゃった哲学とか哲学史とは別に，心理学固有の授業科目というのは？

印東　固有といったらおそらく実験だけでしょう．初等実験というのは固有であって，あと心理学概論というのがあるけど，それは哲学なんかからいわせればむこうも取らなくちゃいけない．

佐藤　われわれの時もそうでしたね．確か横山先生の心理学概論なんか全部取って．

印東　社会学は皆聞かなくちゃいけない．

坂上　当時は概論と実験だけが心理学固有の科目だったんですね．

印東　あと私の学生の頃には心理学史というのがあるんですが，それはさっきの川合先生のヴントの民族心理学なんです．これがまた苦手で．苦手というのは私が苦手だったという意味ですよ．

小川　東大では出先生が古代哲学史という講義をして居られましたが，

ギリシャ語がでてくるので弱りました.

印東　出隆さんね.

小川　ですからギリシャ語も多少は覚えなきゃしょうがない. 大変だったですよ, 哲学をうけるというのは. 東洋哲学はあまりやらなかったと思いますが.

印東　私はあったんですよ. あれは参っちゃった. (笑い)

小川　あったのかも知れないけれども余り中身を覚えていませんよ. 出先生のはギリシャ語を覚えてないと答案が書けないのでそれをはっきり覚えています.

印東　ウォルフガング・ケーラーね, 彼がどっかに書いてますが, ドイツもやはりそういう傾向だったんですね. ケーラーにいわせると, 心理に来る学生はいらないことばっかり覚えてきて, 肝心なこと, たとえば物理学とかそういうものをちっとも学ばないで, 彼にいわせると必要もない認識論なんていうものを学んでくるから困る, と書いているところがあるんです. やっぱりそうだなあ, と私思ったことがあるんです. (笑い)

ただし私は今になってみると, 認識論なんか必要ないとは思いません. ある程度の知識として知っておいていいことだと. すべての科学は哲学から派生しました. イギリスのような保守的な国ですと今でも数学系の雑誌で *Philosophical Magazine* というのがある.

坂上　要するに初めにドイツの心理学というのがあって, それから先生方が研究を初められたころ, アメリカの心理学がはいってきたわけですよね. そういうふうに今までのドイツ流の心理学から徐々にアメリカの心理学へと変わってくるとき, 何か時代の変化の予感のようなものはおありでしたか?

小川　もちろん戦前と戦後ではあったでしょう. アメリカのいわゆる行動主義を心理学がこれほど関心の対象としたというのはやっぱり戦後ですよ. 戦前はもうまったくヨーロッパ流の心理学.

印東　小川さんの時はやはりゲシュタルトの影響が強くありませんでしたか？　ただし慶応は無かったんですが．むしろ私は異端者で，今でもゲシュタルトの影響が抜け切れていないんだけれども，私は好きでした．だけど慶応は横山先生ですから，横山先生はドイツあまり好きじゃない．だから慶応は当時としてはかなりアメリカ流でしたね．東大はおそらくドイツの影響が非常に強かったと思いますよ．

古崎　横山先生はドイツがお嫌いと？

印東　嫌いとはいいません．余り関心を払われなかった．

小川　だけれど横山先生のゲシュタルト心理学に対する理解は非常にちゃんとしていられましたよ．別にゲシュタルト主義者ではないのだけれども，むしろ批判的なのだけれども，ろくに読まないで何か言うというのではなかったですね．

印東　ケーラーの *Die physischen Gestalten in Ruhe und im stationären Zustand* (1920) という本がありますね．私はあれを横山先生から拝借して読んだんですよ．ただし，ケーラーが英語で書いた *The place of value in a world of facts* (1938) という本があるんだけれど，先生は毎夏それを読もうと思っちゃ結局読めなかった，ということを何年か言っておられました．

佐藤　あれはぜひ読むべきだというふうに横山先生が言っておられたのを私は記憶しておりますが，それを読んでおられなかったんですか！（笑い）

印東　内容を説明しろといわれて，私が申しあげたことがあるんだ．

佐藤　要するに横山先生は，なんの立場にたつにせよ，広いものを読んでおかなければならないという一冊として，ケーラーの本をあげておられたと思うのです．

印東　*Dynamics in psychology* (1940) といったかな，あれを先生演習かなにかに使っておられたよ．

佐藤　横山先生ご自身の哲学に対する関心というのはどうでしたか？

印東　それはおありになりましたよ．先生はもともと哲学だもの，アメリカの．私よりはむしろおありになったと思う．

小川　横山先生の論文を読むと非常に哲学的ですよ．

佐藤　「識態と覚」という論文を「哲学」に書いておられますね．横山先生自身が，あれは半分哲学だから，とおっしゃってましたけど．

印東　そうですね．「覚」というのは黒田亮さんの言葉なんですね．

坂上　横山先生が心理学実験室を創られたのは確か……

林　横山先生が慶応に来られたのが大正 11 年で，実験室を創られたのが大正 15 年です．塾監局の 3 階の 3 番教室に実験機材を全部移して，心理学実験室が初めて大学内に設置されたことになります．

古崎　実験室ができる前はどなたが心理学を教えていらしたのですか？

林　本科の心理学の教員としては川合貞一先生おひとりです．その他教育学の稲垣末松先生，また東大から福来友吉先生が教えに来ておられました．横山先生は実験室ができるまでは予科の先生です．

古崎　林先生はどなたに教わったのですか？

林　1920 年の「大学令」による大学創立（予科 3 年，本科 3 年）後，私たちが本科で教わったのは岡崎弥太郎先生，城戸幡太郎先生で，また速水滉先生などが非常勤で講義をもっておられました．専任は川合先生と横山先生のおふたりです．横山先生は「心理学実験」を担当されていました．最初の助手には昭和 7 年に卒業された友田さんがなられ，友田さんが召集されている間は私が助手を勤めました．

古崎　予科の方はどなたが教えてらしたのですか？

林　予科は横山先生が主体となって「心理学」の授業がなされました．当時横山先生は助教授でしたのでずっと予科におられ，他に堀梅天先生と西谷先生が授業を担当されていました．私は予科で堀梅天先生に教わったことがあります．後に西谷先生が召集され，その時私は初めて授業をもっ

たのですが，その初めての学生の中に印東君がいたのです．

古崎　実験室が塾監局の中にできた頃はもう心理学科はあったんですか？

林　なかったですね．教育学心理学専攻でしょう．正規の名称は知りませんが．いずれにせよ昭和3年になって15専攻ができ，心理学が教育学から分離したのです．

古崎　それ以前は心理学は教育学の中に含められていたのですね．

林　教育学か心理学のどちらかに卒論を出すかによっていずれの出身であるかが決まったのです．西谷先生（大正4年卒）は教育学に卒論を出されています．

古崎　昭和3年以降は毎年卒業生を出していたのですね．

林　欠員があったこともあるけれども，ほとんどの年，実験をして心理学の論文を書き，卒業していったのです．西谷先生は教育学に卒論をだされたので実験をしていません．余談ですが，西谷先生はドイツから帰ってこられてから私などと共に初等実験をされ，予科の心理学を担当されたのです．

古崎　心理学が独立した当初は心理学の先生は横山先生だけだったのですか？

林　いや，そのほか川合貞一先生が哲学，論理学，倫理学とともにかならず心理学の講義もなさっておられました．それから教育学の学生が少なく，心理学の学生が多いときには，小林澄兄先生が心理学の原書を使って講義をしておられました．例えば私の時には，カール・ビューラーの発達心理学の原書を使って教えを受けました．そのほか，哲学の先生がブレンターノの本を用いたり，橋本先生はフッサールの著書やフッサールのところから持ち帰られたプリントを教材として彼の現象学を教えられました．

古崎　すると当時は心理と教育はかなり密接な関係にあったのですね．

林　そうでしょう．今度取り壊しが決まった四谷の食養研究所では毎月

心理と教育で懇話会を開いていました．スピーカーは両方が交替で出すのです．

古崎　それはいつごろのことですか？

林　私が学生時代にはもうあったはずです．出席するようになったのは助手になってからですが，学生時代にも出たことがあるかもしれません．はっきり覚えているのは，林髞先生がパヴロフのところから帰られてまもなく，条件反射の話を聞いたことです．その時先生が強調されたことは，条件反射と条件反応の違いで，パヴロフはあくまで条件反射の方を研究していたということです．それからしばらくして，林先生の主宰で四谷に条件反射研究所ができて，条件反射の雑誌も刊行されるようになったのです．

それからもうひとつ，横山先生のご指示で東大に行き，高木貞二先生にスピーカーをお願いしたことがあります．その時に聞いたのが，さっき小川先生の話に出たヤマガラの知覚の実験です．

古崎　群化の問題ですね．いつごろのことですか？

林　私が助手の時です．当時の記録は心理学でとった覚えはないので，教育学研究室に残されていたと思います．記録は当時教育の助教授でいらした中山一義先生がとっていらしたので，あるとすれば教育学研究室でしょう．

古崎　どんな方が出席されていたのですか？

林　毎月の研究会には教育，心理の出身で幼稚舎や普通部に勤めておられた先生方も出席されていました．

古崎　研究領域とは特に関係なく，関心のある方々が出席されていたわけですね．

坂上　実験室は初め塾監局の３階にあったんですね．

林　そうです．でもその前に実験機器が地階に置いてあったということも聞いていますが，私が入ったときにはすでに３階の３番教室にありました．一部屋を器材棚や本箱で仕切って３つの部屋として使われていました．

真ん中の部屋に黒板を置き，そこで授業が行なわれていました．その時使っていた大きなテーブルは今も三田の心理図書室にあると思います．

古崎　そのあと綱町の旧徳川邸に移ったのはなぜなんですか？

林　塾監局自体が手狭になったこともあるでしょうし，実験室が3階にひとつしかなかったということもあるでしょう．移転の時は太田垣さんがリヤカーひきをしてました．

古崎　移転したのはいつですか？

林　昭和 15 年だと思います．綱町時代は私も兵役についていたのでよく知りませんが，吉田俊郎君，槇田仁君，河合悟君たちが研究していたのではないですか？　ここの実験室は平屋建てで，3部屋あったんですが実験は一組しかできませんでした．したがって実験が始まると他のものは外の芝生で待っていなければなりませんでした．そのうち，旧徳川邸の本館の一部屋を借りてそちらでもできるようになった．それから私が召集されているころ，実験機器を疎開するというので，ツイメルマンなどの音響関係の実験装置を徳川邸の2階に疎開させたのです．その本館の2階が戦災を受け，全部焼失してしまった．

古崎　綱町から今度は旧図書館の横にあった第一研究室の3階に移転したわけですね．

印東　昭和 27 年です．それはここに高等部の建物があったんです．それの3階に移りました．

坂上　資料には元高等部とかいてありますが……

林　本来の高等部の建物は今の新しい図書館のところにあった木造の2階建てで，戦後それを立て替えた直後にそこで心理学会をやったことがある（昭和 24 年）．

古崎　高等部と予科はそれぞれ独立したものですね．

林　高等部は4年制で専門学校と同じ，大学とは全く独立です．予科は3年制でそれから大学に進む．ただ，高等部で運動部の選手などは卒業後

大学に進む人もいました.

古崎　予科はどこにあったんですか？

林　塾監局の裏手に木造校舎がいくつもあって，そのあちこちの校舎を使っていました.

佐藤　幻の門からはいってきて裏ということですね．今は正門がありますから，裏手と言ってもピンとこないかもしれませんね.

古崎　そうすると予科だけの校舎はなかったんですか？

林　ありませんでした．私の助手時代にこれらの木造校舎を取り払い，新しく今の第一校舎ができたのです.

古崎　登戸には何があったのですか？

林　それは戦後の話です．三田が戦災で焼けて校舎が足りなくなったので，陸軍の化学研究所を借りて授業をしていたのです．それから三の橋の獣医学校を借りて 1, 2 年後に新制大学が発足したのです.

小川　私が塾に来たのは，新制大学ができるというために来たのです．ですから昭和 25 年ですかね．その前の年に塾で主催された学会（心理学会第 14 回大会）で講演をしたのです.

印東　3つ特別講演があって，その1つ.

小川　それは操作主義に関するものだったのです.

古崎　戦災で三田はどれぐらい焼けたんですか？

佐藤　塾は全国の大学の中でもっとも戦争の被害を受けたところで，その復興のために財政的に大変な苦労をしたということを聞いています.

林　戦災の跡ははっきり覚えていませんが，木造の建物はほとんど焼けてしまいました．塾監局も一部被害を受け，旧図書館は骨組みを残して中は焼けてしまいました.

坂上　第一研究室の次にようやく現在の新研究室になるわけですね．その間研究室はどうなっていたんですか？　一時的にどこかに引っ越していたんですか？

佐藤　まず半分建てて，少しずつ移転していったはずです．

小川　これが建ったのは印東さんがアメリカに行っているときですね．私もその途中アメリカに行って，こういうものが建ったと話をしました．

坂上　資料には昭和 44 年と書いてあります．秋に完成したと．

印東　確かに建設が始まったときはいなかったと思います．完成したときはどうもその年からいえば，帰ってきているようです．

小川　ちょっと見ると，ハーバードの心理学教室のあるウィリアム・ジェイムズ　ホールにとても似ているのですよ．

印東　ただしあれは全部が人間行動関係だけど，こちらは経済もはいるんだ．(笑い)

小川　そうそう，これ全体ぐらいが心理学です．

坂上　この資料によると，大正 15 年の実験室の開設に当たって横山先生はかなり多量の実験機器を買い集められたようですが，先生方がスタッフとなられた時にはその機械はまだ使われていたんですか？

小川　私が昭和 25 年に来たときには元のものがほとんどそのまま残っていたと思います．耐久財だけでなく色紙のような消耗品までも残ってましたね．

印東　計算機も横山先生が購入されたものがまだありました，アメリカのやつだったから．あれがあったんで私助かったんですよ．ただし，半分ぐらいは戦争で焼けましたね．林先生のお話しにあった，ツイメルマンなどは初めに入ったものです．今から見るとずいぶんプリミティブなもので，球のついた振り子をふってその球をぶつけて音を出すわけだけど，音の強さを加減するには振り子をふりだす位置を変えるだけだもの．

坂上　非常にシンプルですね，アイディアが．(笑い)

印東　すべてメカニックなんだから，エレクトロニクスの前だからね．

坂上　先程のお話では，初めは横山先生が心理学実験を担当されていたそうですが，どうなんですか，われわれが伝統としてずっとやっている初

等実験は，先生方がスタッフに加わられるようになってから変わったというようなことはおありだったんですか？

小川　それは私が来てからも変えましたね．いくつか内容を加えたり変えたのですよ．

印東　それに新しい計器が伝わってきたからね．

佐藤　そういえば累積記録器は動かなかったことがありましたね．最初，何か調子悪くて．

印東　何かが悪かったらしい．それを作ったハーバードの技師のガーブランドがしきりに恐縮していたから．

佐藤　累積記録器はほとんど使い物にならなかった．

小川　初めはね．

佐藤　それからスキナーボックスは配線が間違っていたんじゃないかと思うんです．アメリカのは餌箱が上がるときにはキイライトが消えるんですね．ところが慶応に届いたのはつきっぱなしだったんです．ですから配線が違っていたのか，故障があったのか……

印東　ラルフ・ガーブランドは，あの話はしてくれるなと，しきりに言っていた．(笑い)

小川　ともかく何度か問い合わせたよ，向こうに．

坂上　印東先生はスタッフになられてから，何か新しい測定機器とか買われたのですか？

印東　そのころはまったく駄目でしたね．

坂上　マルベの混色器回すしかなかった……

印東　色紙は買いましたよ．なぜ色をやったかというと，一番安あがりだったんですよ，色が．今は色をやろうと思ったからカラーディスプレイなんか大変ですけどね．それだけが理由じゃないけど，一つの要素ではありました．私が来て一番大きな初めに入ったものというのは，卓上電動計算機，モンローというやつね，歯車の．

佐藤　それはもう私も知っている頃ですね……ちょっと話が飛びますけれども，ここで心理学の将来についてお話しをお聞かせ願えませんでしょうか．21世紀に心理学はどういう方向にいくのか，また心理学の教育というのは文学部にとどまってやっていくのがいいのか，それとも別の形がいいのか，というようなお考えは？

小川　だけどそういうのはやっぱり自然に変わっていくよね，変わる必要がある時にはね．(笑い)

佐藤　予測といいますか……

小川　だから何かちょっと言えないね．

佐藤　それでは心理学をやる学生には少なくともこういうことは勉強しておいてほしいというようなことは？　というのは，これまで心理学が扱ってきた問題を今ではいろいろな分野が扱い始めていますね．そうすると心理学の独自性というかアイデンティティはどこにあるのかということになるわけです．

小川　やっぱり哲学的な思考というものは必要なのではないかね．哲学的な思考がないと，心理学とは何かと言ったって，わかるものじゃないし．科学とは何かということがわからないとね．だから科学論的な勉強というのはいつでも必要なんじゃないかと思うんだ．それを哲学でやるなら，そういう意味での哲学は必要だね．

印東　哲学も少しは変わってほしいですね．

佐藤　哲学自身も少しは変わってきていると思いますが．

印東　今はバイオテクノロジーの時代ですよね．これは私が学生の頃には全く予言できませんでしたよね．それはつまり今世紀半ばで物理学がかなりいくところまで行っちゃったわけ．そしてその技術が流れて，やっと分子生物学が現在のような花を開くような機運になってきたわけです．私はその次に来るものは心理学だと思います．ただし，それがいつ来るかといわれたら，まだ一世紀ぐらい後だろうとは思います．思うけどやがては

くると思うのです．その時に何を準備しておいたらいいかといわれたら，そういうものが早く来るように，そして来たときにちゃんとできるような下地をわれわれが作っておきたいです．

坂上　アメリカ社会の中で，心理学というのはそれこそ急速に伸びてきた分野だと思うのです．現在，先生がご滞在になっていて，アメリカの心理学の方向だとか，予測できることはございますか？

印東　これはかなり不調和だと思います．というのは本屋さんに行ってサイコロジーという棚を見ますね．そのうちの大部分はわれわれにとってまったく無縁のものです．

佐藤　ハウツーもののようなものですね，普通の人が買う．

印東　だから普通の人が心理学に持っているイメージと，大学の中でやっている心理学はまるで違うんですよ．私もそうでしたし，今の学生もとまどっています．ただ，私は日吉の1年生に対する専攻説明会で昔よく言ったけど，心理学の学生には文学的なセンスと理科的な素養があってほしい．その信念はいまだにかわりません．それはアメリカでもそうです．

私は色彩をやっていますからいつも思うんだけれども，かつて自然を研究するヒーローというのはみんな色彩に手をつけたんです．ニュートンがそうでしょう，ゲーテがそうですね，それからヘルムホルツはもちろんそうですね．それは無理もないんで，自然を研究していれば，光とか色彩というものは最も目につく自然現象なんです．ですから当然手を付けたわけです，手の付け方はそれぞれ違いますが．私はもう少し心理学的なサイドからの研究が加わるべきだと思っているんです．

今の認知工学もだいたいそっちからきてますね．そうするとたとえばコンピューター・ビジョンなんていうのも，AI 的なところが強くて，要するにパターンが認知できればいいやということになって，人間の認知と必ずしも関係していない．心理学としては，だからそうでない面からの切り込みが必要だと思いますね．

小川　何だか哲学からだいぶ離れてしまったね.

佐藤　三田哲学会に希望するといいますか，期待するといいますか，何かございますか？

小川　このごろは心理学が主催した例会が盛んにやられているでしょう？

佐藤　フィリッピン大学のラグマイとか，ウェスタンミシガンのマロットとか，それにカンサスのベアもね.

小川　僕はそれにはほとんど出たことがないけれど，心理だけじゃなくて哲学の人も聴きに来るのでしょう？

佐藤　それが残念なことに心理の時は心理の人だけという感じですね.

小川　それは心理学の中の話だけやってるから，わからなくて来なくなるわけでしょう.

坂上　心理学自体も細分化されてきていますしね.

印東　心理学が細分化したり，専門化するのはいいけど，やっぱり共通のグランドは持ち続けてもらいたいですね．それが哲学的な側面ということになるんだと思いますが．私は日本にいたとき，長い間科学と哲学の会というのに属していたんです，山内恭彦さんがやっておられた．その会で他の分野の人と話をするのはかなり有意義だったと思います．私の話に興味を持つ人も多かったしね．ただかなり偏った人たちでしたけど.

日本には学際的ということばがあるじゃない．専門化もいいけどそういう面は捨てないほうがいいと思う．ただし，そのためには心理学自身がリーダーシップをとれる立場を確保するだけの研究が必要でしょう.

佐藤　それではこの辺で，どうもありがとうございました.